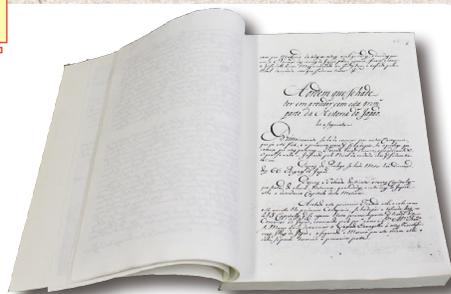


# 外の目から見た日本

## 宣教師が見た日本



### ●「傑出した国民」「良い素質」

16世紀、日本にやってきたキリスト教の宣教師たちは、極東の島に思いがけず、文明化した誇り高い民族を発見しておどろきました。何よりも、身分の低い者でさえ盗みをせず、読み書きができることに強い印象を抱きました。

イエズス会の宣教師ザビエルは、ゴア（インド）の教会への手紙にこう書いています。

「日本人は、私が遭遇した国民の中ではもっとも傑出している。異教徒の中で日本人にまさるものはあるまいと考える。彼らは総体的に良い素質を有し、悪意がなく、交わってすこぶる感じがよい」

「日本人はたいいてい貧乏である。しかし、武士たると平民たるとを問わず、貧乏を恥辱と思っている者は一人もいない」

### ●ヨーロッパ人をしのぐ賢明さ

ザビエルの後を継いだイエズス会布教長のトルレスは、日本人の暮らしが自給自足をしていて豊かだと言います。

「この国の豊かさはスペイン、フランス、イタリアをしのいでいる。キリスト教国にある一切のものがこの国にある。彼らの長所を数えてゆけば、紙とインクのほうが先に尽きてしまうであろう」

都を中心に布教にあたった司祭オルガンチーノは、さらに高い評価をしています。

「私たちヨーロッパ人は互いに賢明に見えるが、日

本人と比較すると、はなはだ野蛮であると思う。私は本当のところ、毎日、日本人から教えられていることを白状する。

私には全世界でこれほど天賦の才能をもつ国民はないと思われる」

### ●日本の教会の統括は日本人に

ただ宣教師たちの誰もが日本人を高く評価していたわけではありません。トルレスの次の布教長カブラルは、日本人の信徒を司祭に登用せず、司祭に必要なラテン語も学ばせませんでした。彼は冷淡にこう言っています。

「彼ら日本人教徒が（修道会に入って）共同の、そして従順な生活をしているのは、ほかに生活手段がないからだ」

これに対しイエズス会の東インド巡察師として来日したヴァリニャーノは、そうした態度は布教のさまたげになるとして、カブラルを解任し、こう述べました。

「日本人は、外国人の支配に耐えしのぶほど無気力でもなければ、無知でもない。日本の教会の統括は日本人にゆだねるよりほかに考えるべきではない」

『日本史』を書き残した司祭フロイスは、日本と西洋がまったく正反対である点を列挙して「日本人は罪人を平然と斬首するが、家畜を殺すと仰天する」と首をかしげています。彼らにとって日本はやはり「不思議の国」だったのです。